

2012年3月10日 卒業式 学長式辞

長崎国際大学

学長 潮谷 義子

春は名のみの一——私どもが親しんだ童謡『早春賦』の中にこのようなフレーズがあります。寒さを感じられ、春は名前だけと思っはいても、力強い生命の息吹を木々に花々に、また、小さな動物たちにも感じる事ができる今日この頃、第9回の卒業式、学位記授与式を迎えることができましたことは、望外の喜びでございます。また、本日は、朝長佐世保市長、折原同窓会長をはじめ、国、県、市の議員の方々、そして行政関係者の方々、また地元の各界の方々、教育関係者の方々にご列席いただき、卒業式が挙行できますことを大変高い席からではございますが、心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

学部、院生の皆さん、総数338名、ご卒業、まことにおめでとうでございます。また、保護者の皆様におかれましても、ある意味では一区切りできたという喜びの中に、今日の日をお迎えになられたのではないのでしょうか。先ほど、黙祷でもって卒業式を始めさせていただきました。今朝のニュース等々をご覧になった方々は、アメリカにおいてオバマ大統領やクリントン外相、また、パリにおいては日本人の方々が追悼のミサを東日本大震災に向けて捧げていらっしゃいました。昨年の入学式、私は、本大学に新たに迎え入れた学生の皆さんに「どうぞ、志半ばにして大学に入学する夢を絶たれた人々のことを忘れないで下さい」と申し上げました。卒業していく皆さんにも同じように申し上げたいのです。「どうぞ、志半ばにして卒業式を迎えることのできなかつた同じ世代の若者たちがいたこと、このことを忘れないで下さい」と。

こうした冒頭の挨拶とともに、私は社会に巣立つ皆さんに、餞の言葉を申し上げたいと思います。皆さんが、これまでの大学生活を振り返る時、大学は温室だったとすることがしばしばあるのではないかと思います。卒業後の社会においては、予期せぬ出来事、明日が見えない、分からない、また、前途多難な出来事に遭遇することがあります。これが現実です。そのような時は思い出して下さい。東日本大震災で被災された方々は、明日が分からない、希望が抱けない、関わりが絶たれている、そのような中にあつても、自分自身を鼓舞し、自分自身に様々な顧みをし、チャレンジをし、日々その繰り返しの中にいらっしゃいます。そのことを思い出すことによって、自分自身がどうあるべきかをしっかりと見極めていくことが出来るのではないのでしょうか。本学で学んだそれぞれの知識、優れた能力を今後、社会の中で発揮する、これはある意味当然のことです。しかし、同時にその専門知識を使って社会に対して何ができるのか、何を目指そうとしているのか、そうしたことをしっかりと問いつつ、本学のホスピタリティの精神である「いつも、人から。そして、心から。」これをモットーとし、自分とは価値観が異なる人々の間に理解と協働を結びながら、皆さんがしっかりと一歩一歩を高め、チャレンジして行って下さることを心から願っております。

今日の卒業式、私は改めて、人が生きるということ、同時に人が学ぶことには、性差、年齢差、障がいの有無などを越えて、等しく機会が与えられているとの思いを強く抱きました。社会に出ていくと、能力の違い、その中で自分自身が打ちのめされることもあるかもしれません。

しかし、私たちはそれらを越えて生きている、そこに価値観があるということを、この卒業の日に皆さんと一緒に噛みしめ、求められているニーズに対し、各々が社会援助サービスの技術者としての役割を担っていただきたいと思います。人間尊厳の理念と人々が置かれている立場に対しての自立支援に向けて私は何ができだろうという問いかけの中で、しっかりと自分の役割を担っていただきたいと思います。

最後になりますが、私自身も本学においてこのような卒業式の役割を担うことは、今回が最後でございます。少子高齢社会の中、私は老いた者こそ社会に対してチャレンジをしていかなければならないと思っています。4人に1人が高齢者、その人たちが出番は終わった、自分の役割は終わった、そのように思った時、日本は活力を失います。私はこの大学を辞することになりましたけれども、皆さん方に負けないように社会に対してチャレンジをし、「老いこそ出番」という気構えの中で共に生きていきたい、このように考えております。

どうか、皆さんの今後の心豊かに、この人と出会えて良かった、そうした思いの中で人間関係が豊かに展開されていくことを願いながら、私の式辞とさせていただきます。皆さん、おめでとうございます。